

戦後80年

「あの時」を語る

五木寛之さんの終戦引き揚げ



インタビューに答える作家の五木寛之さん 7月17日、東京都港区

引き揚げ後が第二の戦争

終戦を知った時は驚きました。私は中学一年生で「神州不滅」と思い込んでいましたから。政府は「治安は維持される。住民は現地にどまれ」と放送していました。その通り現地（平壤）にとどまっていたら、ソ連兵が入ってきて略奪や暴行が始まりました。「マダム・ダヴァイ（女を出せ）」と言われ、誰を差し出すのか選別しなければならなかった。ボロボロになつて帰ってきた女性に、ある母親が「あの人は病気をもらっているかもしれないから近づいたり駄目よ」と子どもに言う。本当は土下座して謝らなければならぬのに。

「万歳」という話ではありませ

ん。引き揚げ者にとっては帰国後の第二の戦争です。ソ連軍に女性を提供し、身の安全を守つたといううなさまざまな噂が流れ、差別された人も多かった。私は引き揚げ者を「デラシネ」と呼んでいます。日本では「流れ者」「根無し草」と訳されますが、そうではなく、生まれたところから政治的・経済的に力づくで追われ、流浪した被害者のことです。

祖国へ帰ったからと言って

昔、ラジオの報道番組を制作

2 作家・五木寛之さん

するため、満州から引き揚げた人に取材しましたが「いろいろ大変なことがございました」と言うだけで何も話してくれませんでした。「君看よ双眼の色語らざれば愁いなきに似たり」という言葉があります。大変だったことや辛かったことを一切語らず、静かにほえんでいるだけでも、その人が心の中に抱いている憂いが切々と感じられる、という意味でしょう。

私が小説に引き揚げの話をストックに書かないのは、そういう人々のことを思うと、立つ瀬がないからです。本当に大変な経験をした人は、語れない部分がたくさんあります。

◇肌で感じるものを大事に引き揚げといつても、場所や時期によって状況は全く異なります。「本当の情報」を伝えられた政府関係者や特別な階級の人たちは、家財道具を積み、早々に帰国していたようです。お上の言うことを信用している人との間には情報の格差がありました。父は終戦の少し前、「政府がソ連と交渉して米軍と戦ってくれるから、もう大丈夫だ」と言っていました。結果は逆でした。

本当の情報は日常生活の中に転がっているような気がします。戦時中、軍人や兵隊を民家に泊めることがよくありましたが、そういう人たちの話を聞くと「日本は負ける」という空気がありました。SNSのように誰でも手軽に入手できる情報は、上つ面の情報です。自分が肌で感じる情報の方が大事です。

新聞のスポーツ欄には「熱戦」「敗戦」など「戦」という言葉がたくさんあります。私たちは戦争が嫌いと言いつつも、歌舞伎や伝統芸能で描かれる「合戦」に拍手して感動します。人間は矛盾の塊です。戦争はなくならないのかと悲観的になります。聞き手「時事通信政治部・杉本早紀」

五木 寛之氏（いつき・ひろゆき） 1

932年9月、福岡県生まれ。生後まもなく朝鮮半島に渡り、47年に引き揚げ。早稲田大文学部ロシア文学科に学ぶ。「蒼ざめた馬を見よ」で直木賞受賞。主な著書に「青春の門」など。